

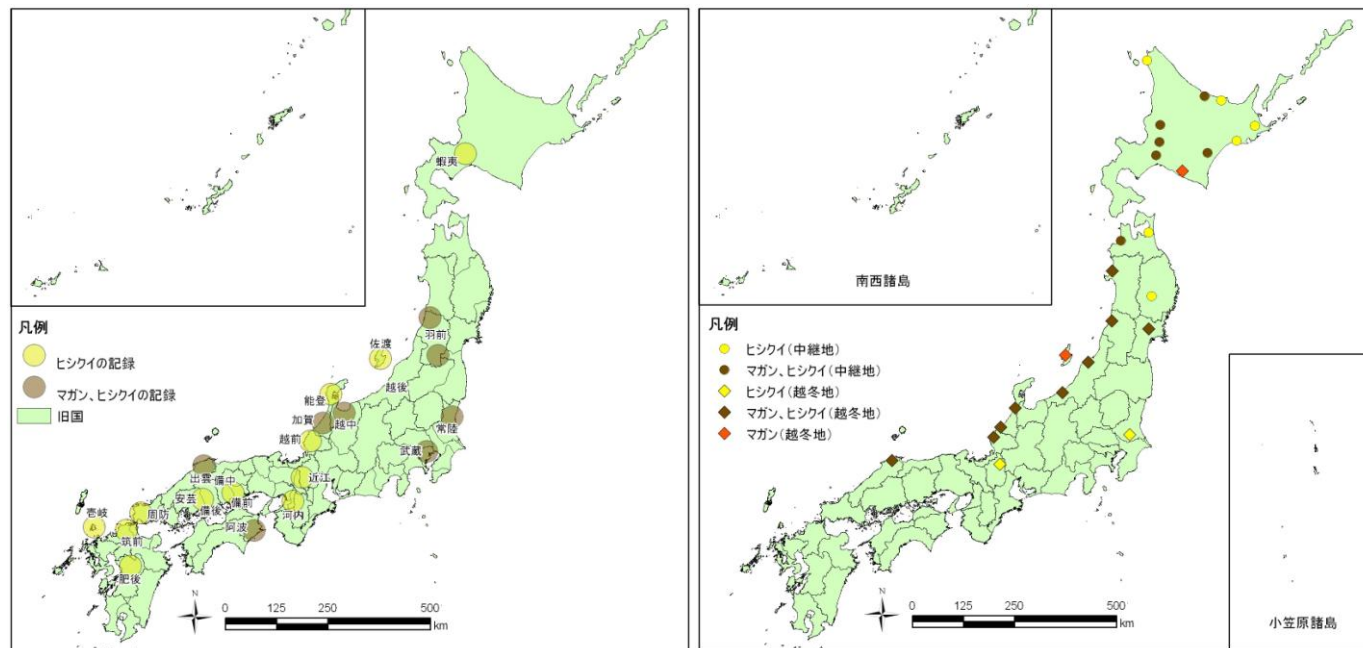
野生生物と人との関わりの経緯

- 江戸時代から現在に至るまで、人と野生生物との関わりは大きく変化してきた。
- 狩猟や生息・生育地の改変、保全といった野生生物とのさまざまな関わりが野生生物の分布域や個体数の変化とも関係している。

◆マガン・ヒシクイ

- ・これらのガン類はかつて冬鳥として日本各地に渡来していた。雁（かり）は俳句の秋の季語であり、また歌川広重の浮世絵「月に雁」や森鷗外の小説「雁」など、文芸のモチーフとしても使われてきた。
- ・明治時代に狩猟によって大きく減少した。1971年に狩猟鳥獣から除外され、同時に国の天然記念物に指定された。現在の渡来地は局地的であり、北日本及び日本海岸に点在している。
- ・マガンの場合、1970年の全国の渡来数が約3,700羽であったが、保護の結果、増加傾向にあり、2008年の渡来数は越冬地である宮城県蕪栗沼で66,000羽以上、中継地である秋田県小友沼（おともぬま）では86,000羽以上となっている。
- ・ガン類（特にマガン）の個体数は増加しているものの、越冬地は特定の地域に限定されたままで、かつてように広く分布する状況には至っていない。

出典：環境省自然環境局 生物多様性センター，2009. 重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト1000）ガンカモ類調査第1期取りまとめ報告書



1730年代のマガン及びヒシクイの分布

出典：環境庁，1987；過去における鳥獣分布情報調査報告書. 呉地正行，1999；JOGA第1回自由集会「日本のガン・カモ・ハクチョウ類の個体群の現状」.

1990年代のマガン及びヒシクイの中継地及び越冬地



マガン (*Anser albifrons*)
撮影：(財) 自然環境研究センター

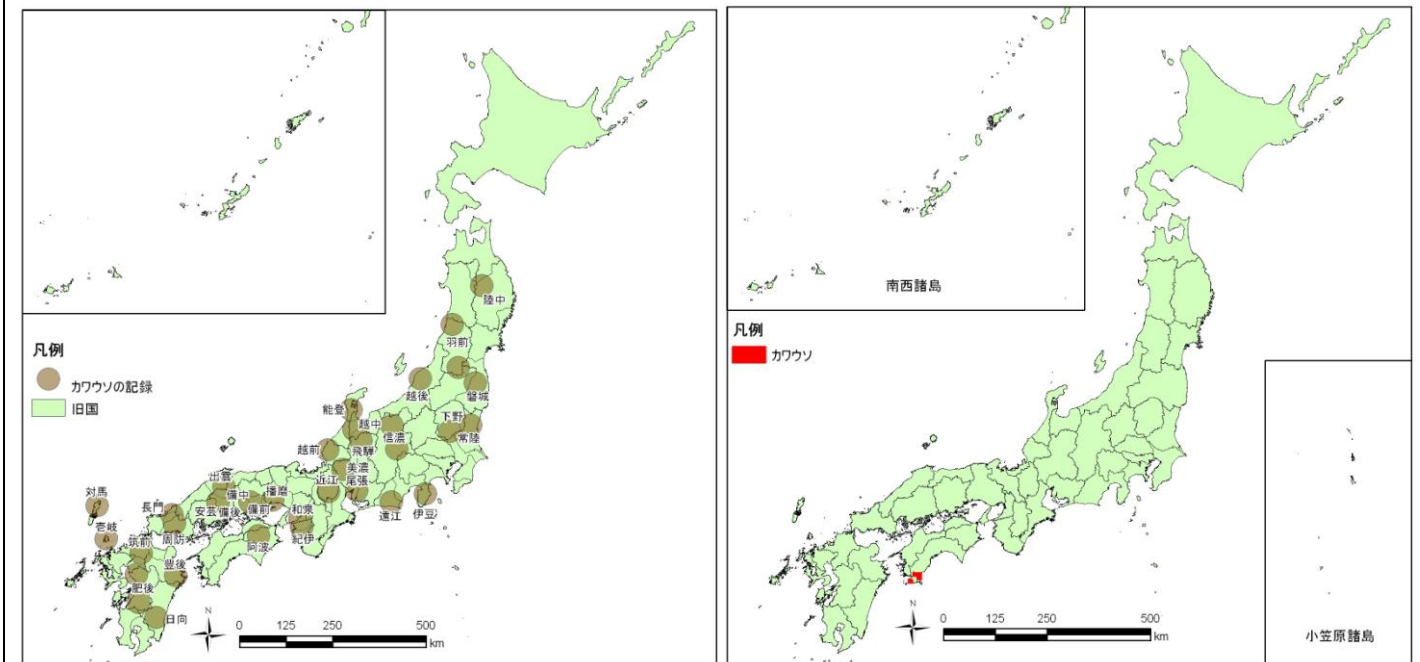


ヒシクイ (*Anser fabalis*)

◆カワウソ

- ・河川の中下流部から沿岸部に生息し、水中で魚類やエビ・カニを、陸上でノネズミや鳥類などを捕食、また川岸に巣穴を掘る等の生態を持つ。
- ・かつては全国に広く見られ、人に化けたり、人が持っている魚を盗るなど、カワウソに関する多くの伝承が各地にある。カッパのモデルとも言われる。
- ・良質の毛皮をもつことから、明治時代に毛皮目的の狩猟によって大きく減少した。1928年（昭和3年）に捕獲禁止となったが、1923年から1927年までの5年間に293頭が捕獲されている（北海道を除く）。
- ・その後、森林伐採や河川の護岸、水質悪化、漁具による混獲などのために著しく減少した。1945年から1983年までの公式死亡記録は126例あり、うち漁具による溺死が39例、いけすの魚の食害を防ぐための捕獲が38例を占める。
- ・高知県で死体が得られた1983年以降、確実な生息確認情報はなく、すでに絶滅したおそれもある。

出典：環境省編，2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック〈哺乳類〉.
阿部永監修，2005. 日本の哺乳類・改訂版. 東海大学出版会.
国際日本文化研究センター：怪異・妖怪伝承データベース



1730年代のカワウソの分布（北海道を除く）

1980年代のカワウソの分布

出典：環境庁，1987；過去における鳥獣分布情報調査報告書.
環境庁，1993；第4回自然環境保全基礎調査 動物分布調査